

西光寺跡 遺

2001 地点

Saikouji Loc.2001

- Features
Site Name : Saikouji
Loc. No. : 2001
North Lat. : 32° 45' 16"
East long. : 130° 46' 10"
Altitude : 11.4m
- Investigation
Year : 2020
Research org.: Kashima-machi

- 調査
橋口剛士
- 編集
橋口剛士

嘉島町教育委員会

2021

序

今回、初の西光寺遺跡の調査となりました。かねてより地名に寺名が残りながらも実態が把握されていない本地域において、石塔が付近に分布していることから寺院の痕跡を確認できるかもしれないと期待されましたが今回の調査では捉えることは叶いませんでした。

ただ、調査地点から古墳時代の住居址や中世の溝などが確認され、破片ではありますが甕棺片が出土するなど古くからこの地が人により使われていたことを示すものであります。

近年、この西光寺地区を含む下六嘉丘陵上では住宅建設が多く計画されており、これまで調査が行われておらず詳細については不明とされていた当地域の遺跡の様子が少しずつわかり始めてきたところです。

これらは、矢形川を挟んで対岸の井寺古墳や町が進める土地区画整理事業で調査された上官塚遺跡などとの関係を知る上で重要な知見となりますので、今後の調査の進展を期待したいところです。

最後に調査に際してご協力いただいた地権者ならびに関係各位にお礼を申し上げますとともに今後の当町における文化財保護意識の高まりを祈念して序文とさせていただきます。

2021年11月

嘉島町教育委員会 教育長 高野 隆

例 言

- 1 本書は、個人住宅建設に伴って実施した、熊本県上益城郡嘉島町下六嘉所在の西光寺遺跡 2001 地点の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の調査は、嘉島町教育委員会が主体となり、社会教育課が調査を担当した。
- 3 資料の整理は、嘉島町文化財センターで実施した。出土資料及び記録は、嘉島町文化財センター及び上島倉庫に保管されている。
- 4 発掘調査時の写真は、橋口剛士が撮影し、遺物写真については牛嶋茂が撮影した。
- 5 本書の執筆・編集は橋口が行った。
- 6 土層及び土器胎土の色調を示す際には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」を使用した。

作業において下記の方々に尽力いただいた。

○発掘調査（敬称略）

池永輝明 木村崇 木村奈緒美 後藤章一 坂本貴美子 清水眞須江 田中知恵美 永田治敏 西岡榮子 水元文廣 村上惇子 森下富子 森嶋まち子 山崎伸明 山村俊範 吉富雪子 渡邊いわり 渡邊ゆかり

○整理作業（敬称略）

嵐英隆 土田みどり 結城あけみ 前田和子 田中裕子 平川恵里子 緒方聡美 山田由美 岩下恵美子 吉田和子 森嶋ユリコ 石田敦子 溜渕俊子 高田由美 椎葉一代 岩野一子 大川好美 塩田喜美子 高田清香 宮守富子 山内洋子 永田清美

目 次

第1章 調査の経緯と体制	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査体制	
第3節 調査の経過	
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の地理的環境	
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	
第3章 調査の成果	5
第1節 調査の方法	
第2節 土層と地形	
第3節 縄文時代	
第4節 弥生時代	
第5節 古墳時代	
第6節 古代	
第7節 中世	
第8節 近世	
第4章 総括	20
第1節 西光寺遺跡 2001 地点での調査結果について	
第2節 西光寺遺跡について	
図版	25

第1章

調査の経緯と体制

第1節 調査に至る経緯

竹林であった事業地において抜根を行い、造成をした上で個人住宅を建造するという計画を受けて令和3年5月に予備調査を実施した。

結果、ほとんど遺物・遺構は確認できなかったが一部において浅い深度で遺物・遺構が確認され、滅失が避けられない部分については本調査を実施することとなった。

工事可能部分における竹林の抜根作業と並行して令和3年7月10日から同年8月25日まで調査を行った。また、調査終了後令和2年11月から整理作業を順次実施し、同年12月に完了した。

第2節 調査体制

今回の調査を実施した際の体制は、以下のとおりとなる。

【発掘調査・整理作業】

令和2年度	
調査主体	嘉島町教育委員会
調査責任者	高野隆（教育長）
調査事務局	増永貴士（社会教育課長） 園田ひろみ（社会教育係長） 水政みゆき（会計年度任用職員）
調査担当	橋口剛士（社会教育課 技師）

【報告書作成】

令和3年度	
調査主体	嘉島町教育委員会
調査責任者	高野隆（教育長）
調査事務局	増永貴士（社会教育課長）

園田ひろみ（社会教育係長）
古城史雄（会計年度任用職員）
水政みゆき（会計年度任用職員）
整理担当 橋口剛士（社会教育課 技師）

第3節 調査の経過

1 発掘調査の経過

本調査は7月1日に着手し、8月25日までの約46日間実施された。以下はその調査の抄録である。

令和2年7月10日

調査区を設定し、重機で掘削を開始する。午後から降雨のため作業を中止。

令和2年7月17日

梅雨の終わりの雨が15日まで続き、ぬかるみがよくやく乾いたので表土剥ぎを再開。日中に表土剥ぎは完了したものの、排土山整形中に重機が止まる。どうもラジエーターの故障とのこと。

令和2年7月20日

週が明けて調査区の整備を実施。梅雨明けで一気に夏空となりこの日の最高気温は32.7℃を記録。湿度も高いため、熱中症への配慮が必要と実感。整備をするにも竹根が至る所に這っている。併せて排水が竹林内を流れていたらしくドブのような臭いがきつい。その辺りが黒く変色していた。

令和2年7月22日

現場内での基準点設置を実施。暑さ対策のため寒冷紗を作成。竹の切り口から汁が出て、発酵しているらしく発酵臭がする。

令和2年7月29日

連日30℃を超えて、今日は33.2℃まで上がる。現場はさらに暑い。作業員さんの疲労が著しい。調査区北側の暗褐色土掘削し、黄褐色土混じりのところまで掘り下げる。境界がはっきりとし

ないためもう少し掘り下げてみることにする。

令和2年8月3日

調査区北東部を掘削し、土壌墓と思われる抹角方形の土坑を確認。寺という地名と竹林内に散乱している墓石の存在から妥当なものが確認されたということか。

令和2年8月6日

調査区の一部に覆土が残存しているためトレンチを設けてその厚みを測ることとする。

令和3年8月7日

トレンチでの観察の結果、覆土が思った以上に厚かったため重機で掘り下げる。この夜、調査区に隣接する土地の納屋が全焼する火事があった。翌8日に現地を確認すると焦げた臭いとともにもだくすぶっている様子であった。幸いにして調査区にまで延焼することはなかったが、近くに住まわれている作業員の方は轟々と燃える様子はとても恐ろしかったとのこと。

令和3年8月12日

再度整備及び遺構精査を実施。溝・土坑など複数の遺構を確認。また、調査区東側において住居地と思われる方形の遺構を確認。

令和3年8月18日

主立った遺構の掘削が終了したため、作業員の一部を撤収。残る者で図面作成作業を継続。

令和3年8月24日

完掘した住居地(S08)の床面に楕円形の土坑を認めためため半載したところ土器片が出土。ほぼ完形のように見え、薬棺ではないかと推測。小型ではあるが単棺であったか合わせ口であったものが住居により飛ばされたものか。調査終盤で出てきて少し戸惑う。S12とする。

令和3年8月25日

S12の記録が終了し、調査が完了した。翌日から埋め戻しを実施することとする。



調査の様子

2 整理作業の経過

他の事業関係で整理作業中であるため、各作業において切りが良いところで区切りを付けて順次整理作業を実施した。令和2年11月から作業に着手し、同年12月にほとんどが完了した。個別作業の工程については以下の通りであり、工程表を下欄に掲載している。

(1) 遺物洗浄作業

遺物量はそこまで多くなかったため8月から実施して1週間程度で完了した。

(2) 註記作業

その後問を開けずに註記作業を行い、接合へ引き渡した。

(3) 接合

他事業の整理作業が進行中であったため、切りの良い11月から作業を実施。遺物点数が少ないことや小片がほとんどであったためなかなか大きな形になるものがなかった。主立ったものを実測対象として抜き出した。

(4) 図化作業

12月から実測作業を開始し、1月中旬にピークを迎え完了した。問を置かず実測図の浄書を実施。3月までに完了した。遺構図面については4月に実施して完了した。

(5) 撮影

令和3年3月9日に牛嶋茂氏により遺物撮影を実施。

(6) 編集・執筆

年度明けて令和3年4月から編集・執筆作業を開始。同年9月に脱稿し、刊行作業に入った。

	令和2年度												令和3年度								
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9			
調査・発掘	--	--																			
発掘調査																					
遺物洗浄			--																		
註記						--															
接合・復元																					
実測																					
浄書																					
写真撮影																		●			
執筆・編集																		●			

各作業の実施工程表

第2章

遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の地理的環境

嘉島町の位置と環境

嘉島町は、熊本平野南部、加勢川と緑川に挟まれた平野部に位置する。

遺跡は、嘉島町の東側、矢形川流域にある丘陵の上に存在する。この丘陵は、下六嘉丘陵などと称される。

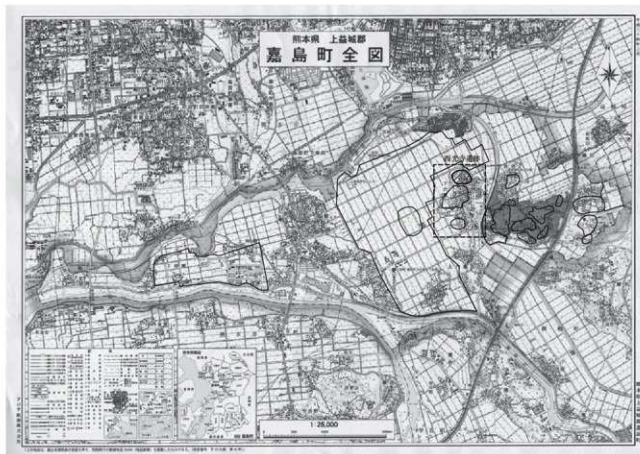
矢形川を挟んで井寺丘陵及び北甘木台地とは連続しない独立丘陵である。先述の台地(井寺・北甘木)の間に見られる断層崖ほどは明確ではないが、下六嘉丘陵にもこの断層ラインの延長上に標高の変わる部分が直線上に存在する。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

1 西光寺遺跡周辺について

西光寺遺跡周辺には多くの歴史的物事が存在する。下六嘉は六嘉村、それ以前の江戸期の手永制下においては鯉手永下六嘉村、それ以前は六嘉荘、さらにさかのぼれば味木(甘木)庄に属する。周辺は縄文時代から近世に至るまで多くの地物が遺されている。

下六嘉丘陵上では弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が丘陵頂部を中心に麓の湧水地点付近を含めてかなり広範囲に遺跡が展開するものと考えられ、一昨年度調査された下六嘉遺跡群



第1図 嘉島町の遺跡地図

1901 地点では、弥生時代中期～古墳時代前期の遺物がわずか 140m の調査区内からケース 50 箱以上もの量が出土するなどこの時期における拠点集落の一端を捉えた可能性があるものとして報告したところである（嘉島町教育委員会 2021）。

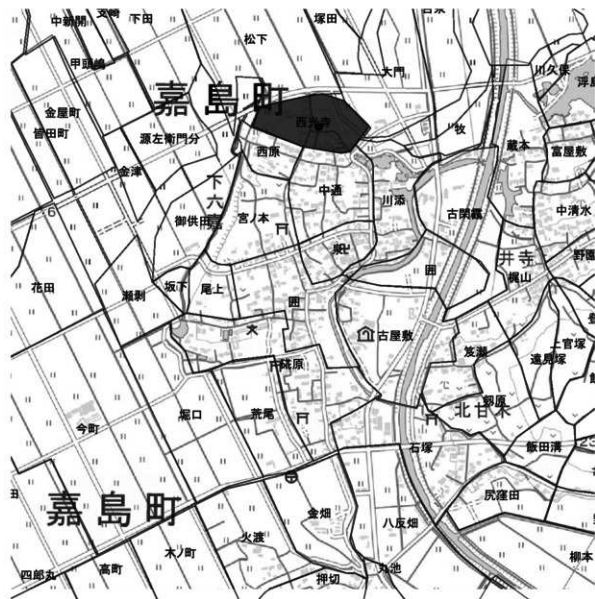
その他の事物についての説明については、上記報告書に譲るとして、本報告においては割愛する。

2 「西光寺」という地名

小字の名前となっている「西光寺」であるが、寺は現存はせず、地名にその名残が見られる程

度である。また、付近に「大門」という地名もあり、寺院の山門であった名残である可能性もある（第 2 図）。

寺がかつてどのあたりにあったかについては確定的なものを得られてはいない。ただし、小字よりも小さな地名であるその地域の人々が特定地点に対して言い習わしている「呼び名」の中に「寺村」というものがあり、その場所が西光寺地区の東側にある一角を示していることと、その付近に薬師堂と呼ばれるお堂が存在し、涅槃図が伝わっていることから、寺があったとすれば地区の東側であった可能性が高い。



・国土地理院発行 国土地理院淡色地図を加工して作成、字の境界は『嘉島町誌』付録の字図を基に作成（一部境界の重複・字名がない箇所がある）。

第 2 図 下六嘉島陸付近の字図

第3章

調査の成果

第1節 調査の方法

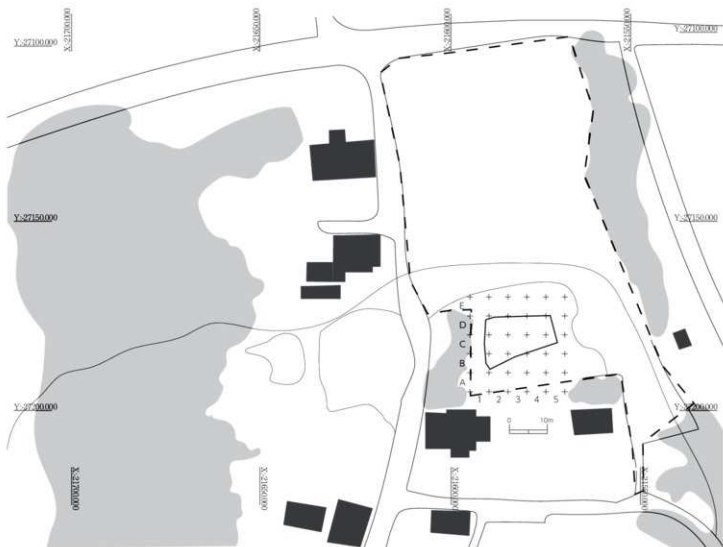
1 調査の方法

(1) 発掘区とグリッドの設定

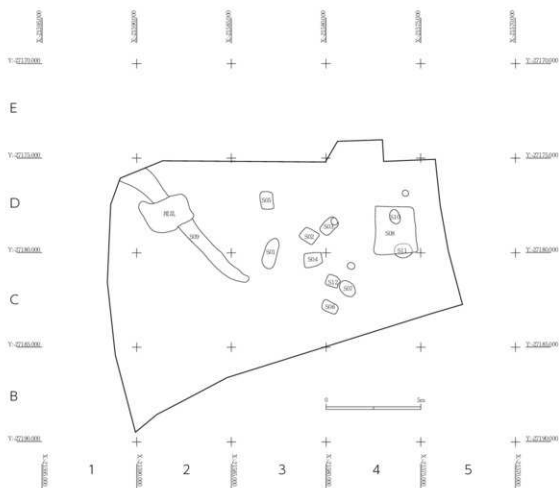
調査対象となる地点に近傍座標である X-27195.000、Y-21600.000 を原点とし、南北に A～E、東西に 1～5 の英数字の組み合わせによる 5m グリッドを設定した。

(2) 表土の掘削と遺構の検出

表土の掘削については、重機により遺構検出面付近まで掘削し、その後人力により遺構検出面まで掘り下げる方式を採った。なお、一部（主に調査区北側）に厚く表土が残っていたため、調査中に再度重機を入れて掘削を行っている。



第3図 調査区周辺の地形及び調査区設定状況



第4図 西光寺遺跡 2001地点遺構配置図

2 記録の方法

(1) 遺構図面等記録作成

遺構や遺物の記録の方法として、平面図についてはSfm/MVSによる3次元計測を実施した。また、断面図については処理時間を考慮して従来通り実測図によった。

Sfm/MVSに使用した機種は、個別遺構については撮影をRicoh社製GR II (APSC、1,690万画素)及びOlympus社製OM-D E-M1 (マイクロフォーサーズ、1,628万画素)を使用し、ボール (Lumica Bi Rod 6G-7500)によりリモート撮影を実施した。遺構配置図など全体のものについてはDJI社製ZenmuseX7 (Super35、2,400万画素、Inspire2搭載)を使用した。

撮影後の処理についてはHP社製Z8 G4及び同Z440、ソフトはAgisoft社製Metashape

Professional (Z8)並びに同Standard (Z440)を使用した。処理により作成された三次元モデルからオルソモザイク処理によりGeoTIFFを作成した。QGISに読み込んだ後、平面直角座標(II系)を入れ込んだ図面を印刷し、現場で確認後遺物の取り上げ等を行っている。

また、作成されたオルソ画像からAdobe社Illustrator2020でトレース図を作成した。

(2) 写真

調査員が撮影する記録写真として、デジタルをNikon社製D810 (35mmフルサイズ、3,635万画素)及び6×7判をHasselblad社製503CXを使用して撮影した。

第2節 土層と地形

1 土層の堆積状況

(1) 調査区の土層概況

調査区はそれまで竹林の中であったことから表土から数十cmは竹の根の影響を受けている。更に、それ以前に土のほとんどを削られていることから表土下にわずかに残存する黒褐色土を除いてはそれよりも上位の層を失っており、表土下すぐに Aso-4 風化堆積物による黄褐色土が露出する部分も存在している。

(2) 調査区周辺の土層

第5図は当該事業に係る予備調査を実施した際の位置及び土層断面図である。

調査区内での状況とはほぼ同じであり、表土下に複数の土層を認める箇所は北側の9、10トレンチに限られる。色調は黒褐色～暗褐色と熊本地方の火山灰性土壌に見られる土層とは少し傾向が異なる。

また、黒褐色土には AT (始良丹沢火山灰) 起源と思われる火山ガラスが少量含まれており、ニガ土と見ている。

この下位に Aso-4 風化堆積物の黄褐色土が堆積する。多くのトレンチではこの黄褐色土層に 30～50cm 程度の深度で到達した。一方で9、10トレンチでは 100～150cm と開きがあり、地形的なものを考慮に入れても前者は相当程度削平により旧地形が失われていることを示している。他方9、10においても削平は免れておらず、ニガ土よりも上の層は失われていると考えて良いだろう。

総じて事業地における土層堆積状況は良好であるとは言えず、削平により多くの遺物が失われていると判断している。そんな中で辛うじて削平を免れた本調査区のみが、抜根により影響を受けると考えられたため調査を実施した次第である。

2 地形

上記のこともあって調査区周辺の地形は、人為的に大きく変えられていると思われる。

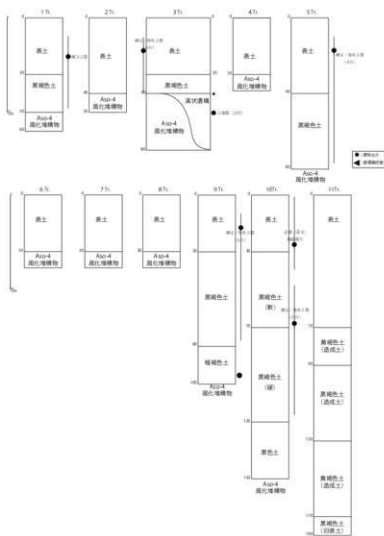
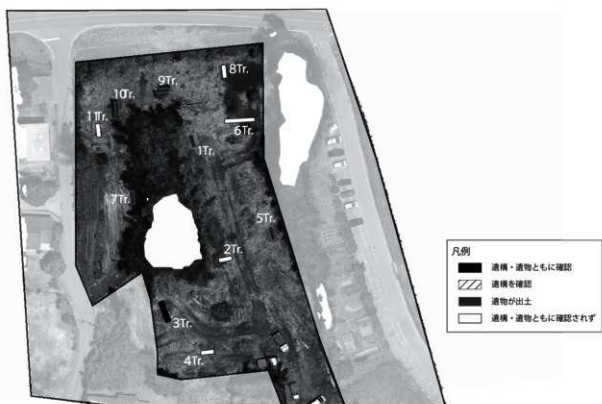
基本的には概ね北側に向かって緩やかに傾斜

する斜面上である。現状では水路で切られているが、本来はそのまま水田の広がる低地につながっていたものだろう。

この近辺を問わず嘉島町の丘陵地においては少なからず土が削られており、本来火山灰性土壌の堆積が認められると予想される地点においても我々が「地山」と呼称する Aso-4 風化堆積物起源の黄褐色粘質土が表土下に認められるなどしている。それだけ本来あるべき土が失われているということの証である。

削られた土はどこへ行ったかということ、下六嘉丘陵北の矢形川・木山川に面した低地が湿地帯であったために田に向かず、高いところから少しずつ土を持って行き埋め立てて田としたということが開拓誌や町誌に認められる。

そうして開かれていった田には開いた者の名が残り、小字に名字のようなものが付けられている。



第5図 西光寺 2001 地点予備調査実施箇所及び土層断面図

第3節 縄文時代

明確に縄文時代に位置づけられる遺構は認められず、遺物も包含層から数点出土しているに留まる。石器も剥片等が少量認められるものの定形的なものは存在しない。

1 遺構

前述のとおり、遺構は認められなかった。

2 遺物 (第6図、第1表)

図示に耐えうる資料としては1点に限られる。1は縄文時代後期の浅鉢である。胴部は内器面・外器面ともに貝殻による条痕調整、口唇部はナデが施される。



第6図 包含層出土縄文土器

第1表 包含層出土土器 (縄文時代) 観察表

図番	品名	素材	形状	用途	出土	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層
1	鉢	土	浅鉢	飲食	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1

第4節 弥生時代

1 遺構

確実に弥生時代と特定できる遺構は確認できなかった。

2 遺物

(1) 甕棺 (第7図-2, 3)

小片ではあるが包含層中から甕棺の破片が出土した。いずれも小片ではあるが元来は大型の甕である。表面は荒れている。付近に甕棺墓が存在することを示唆するものである。



第7図 遺跡出土土器 (弥生時代) 実測図

第2表 包含層出土土器 (弥生時代) 観察表

図番	品名	素材	形状	用途	出土	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層	出土層
2	甕	土	甕	葬具	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1
3	甕	土	甕	葬具	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1	11-1

第5節 古墳時代

1 遺構

(1) 土坑 (S11、第9図)

S11は、後述する古墳時代の遺構であるS08の床面から検出された。

土坑は直径約1mの楕円形であり、深さは住居の床となり上部のほとんどを失うが検出面から20cm程度である。土坑底面付近に壺が一個体ほぼ丸々潰れた形で出土した(第8図)。

○壺(第9図-6)

6は二重口縁壺である。土坑に残存していたのは疑似口縁より下部の胴部であり、口縁を全て欠く。胴部は球形胴で強く張り出しており、甕の可能性を考慮していたが頸部が強く締まるため口縁部を欠いた二重口縁壺とした。

器面は荒れており調整についてはあまり判然としないが、胴部上方に斜方向のハケ目が認められる。底部を欠く。

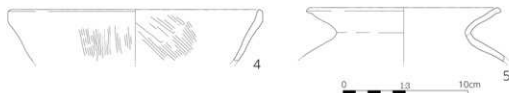
(2) 住居址 (S08、第10図)

S08は幅約2m、長さ約3mの竪穴式住居である。削平により床面と若干の壁を残すほかは消失している。遺構の床面北東隅に焼土の集中を認めるが、掘り込みは確認できなかった。

遺物はほとんど出土しなかったが、床面において高坏が出土している。

○高坏(第10図-7)

7はやや浅い坏部を有する。脚部は端部で丸く肥厚し段を形成する。裾は緩やかに弧を描きつつも下部付近で傾斜を緩め広がりを見せる。



第8図 遺跡出土土器(弥生時代)実測図

このため外器面では屈曲を持たないが、内器面では屈曲している。内外ともに一部赤彩の残存が認められる。

2 遺物

包含層に含まれる古墳時代に属する遺物としては、甕(4,5)がある。

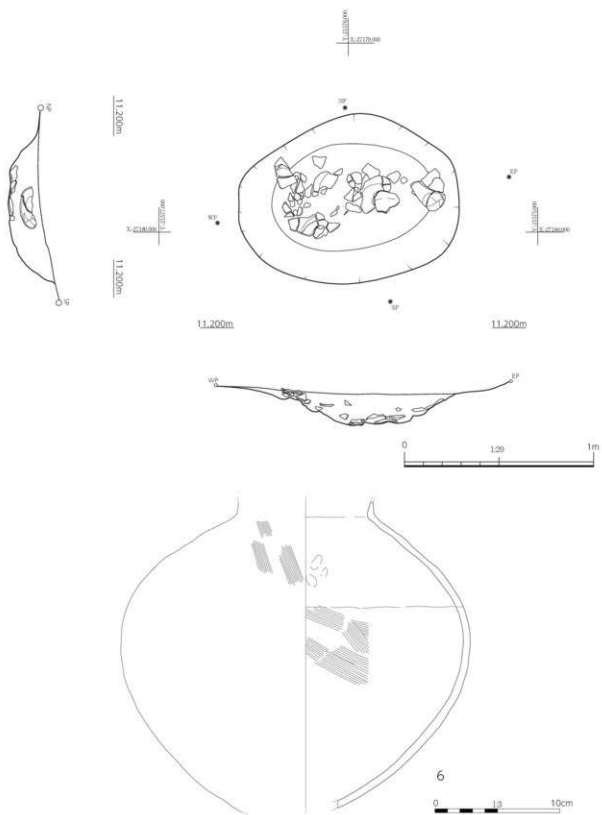
○甕(第8図-4,5)

4は土師器の口縁部である。口縁はやや肥厚し、口縁下部で段を形成し胴部へ流れる。外器面はやや摩滅気味で調整の痕跡を認めないが、内器面には斜め方向のハケ目が口縁下部に残り、口縁部付近はナデている。

5は甕の肩部まで残る資料である。口唇部はナデにより斜め方向に平坦面を形成し、頸部は屈曲し「くの字」状を呈する。器面の内外ともにナデ調整が認められる。

第2表 包含層出土土器(弥生時代)観察表

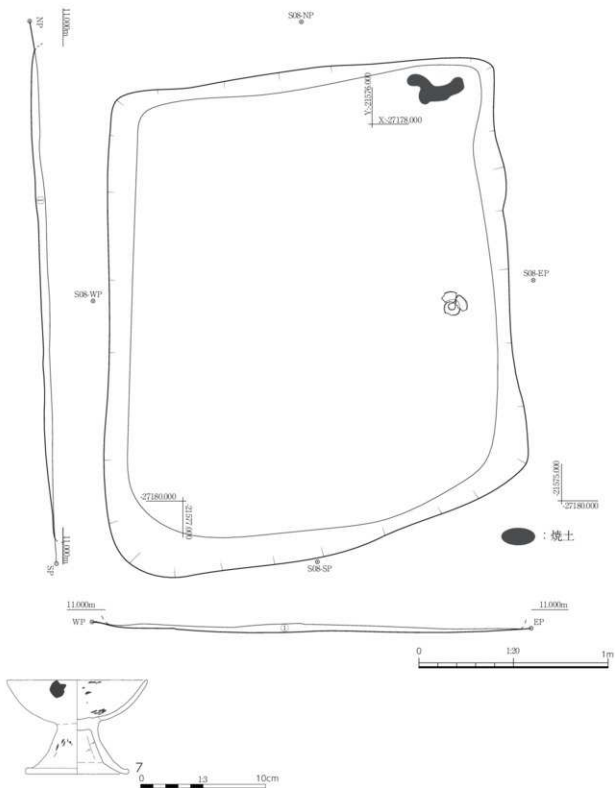
調査年度	調査区画	出土位置	出土層	器種	材質	形状	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	器体	表面彩	内面彩(%)	外面彩(%)	調査者	調査日	備考
4	11	2	S11	壺	土師器	二重口縁	10.1	10.1	-	底縁、器底に赤彩	なし	なし	なし	中野	2014.10.1	
4	11	2	S11	甕	土師器	口縁部	10.1	10.1	-	底縁、器底に赤彩	なし	なし	なし	中野	2014.10.1	



第9図 土坑 (S11) 遺構・出土遺物実測図

第3表 S11 出土土器観察表

品目	数量	形状	材質	用途	出土層	出土位置	出土高さ	出土深さ	出土向き	出土状況	出土層	出土位置	出土高さ	出土深さ	出土向き	出土状況
土器	1	片断	土質	不明	遺構内	11.31	11.31	-	南中, 南西	11.31-遺構	11.31-遺構	11.31	11.31	-	南中, 南西	11.31-遺構



第10図 住居址 (S08) 遺構・出土遺物実測図

第4表 S08 出土土器観察表

調査年度	遺構	土器	土器の種類	形状	材質	用途	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	出土層	出土位置	出土状況	備考
1	焼土	1	土器	土器	土器	土器	21.1	2.4	8.2		焼土、石瓦、焼瓦等 敷き詰め	焼土	焼土	焼土、石瓦、焼瓦等 敷き詰め

第6節 古代

1 遺構

明確にこの時期に位置づけられる遺構は確認できなかった。

2 遺物

古代に属する土器は少なく、図示できるのは2点のみである。8は須恵器の台付鉢である。

鉢部は口径に比して深くなるものであり、台部を欠く。

9は越州窯青磁の碗である。口縁部付近の破片であり底部を欠く。口縁は肥厚し帯状に回る。



第11図 包含層出土土器実測図

第5表 包含層出土土器（古代）観察表

検出番号	遺構	出土層位	時期	種類	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	残存高 (cm)	胎土(色調)	釉(色調)	調整(内)	調整(外)	焼成	備考		
8	溝	-	古代	須恵器	台付鉢	鉢底	-	(5.1)	-	赤土	黒	滑	滑	ナデ、同軸ナデ	ナデ、同軸ナデ	良好	
9	溝	-	古代	青磁	碗	口縁-胴部	(17.4)	-	(2.7)	黒土(白)赤土	黒	滑	滑	-	-	良好	層別調査

第7節 中世

1 遺構

(1) 土坑 (S01-04,06,07,12、第12図)

調査区の中央付近で長さ約1m、幅約30～40cmの長方形の土坑が複数確認された。削平が著しく、いずれも検出面から数cm～10cmで床面が出るなどはほぼ輪郭を留める程度であった。遺物は確認されなかったが近世の墓標や石塔が転がっていたことから墓域がこの付近に展開していたと見られ、土壌墓の可能性を指摘したい。遺物が認められないため明確な時期を特定できないが、周辺の遺構との関連から中世以降、もしくは近世の土壌墓と位置づける。

(2) 溝 (S09、第13図)

調査区の西側において、南東-北西方向に流れる溝を確認した。予備調査で確認された遺構である。途中攪乱を挟むため、埋土上層は近代のゴミを多く含んでいたが、下部に至るにつれ

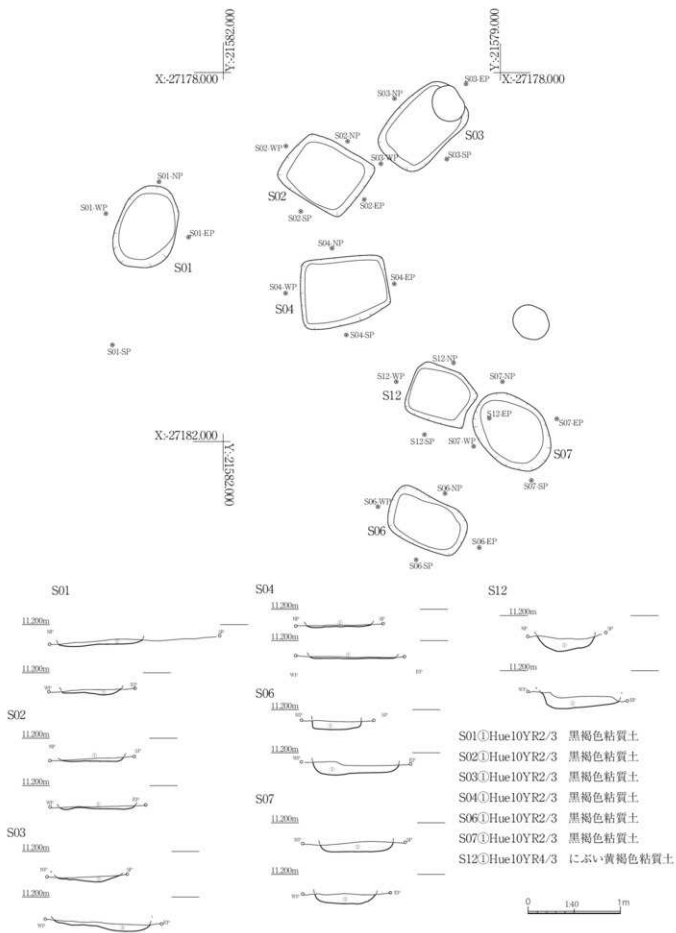
中世の遺物が増え、底面付近からも中世のものが出土している。およそ地形の傾斜に合わせて走っており、排水等の用途のものか。

○風炉 (第13図-10)

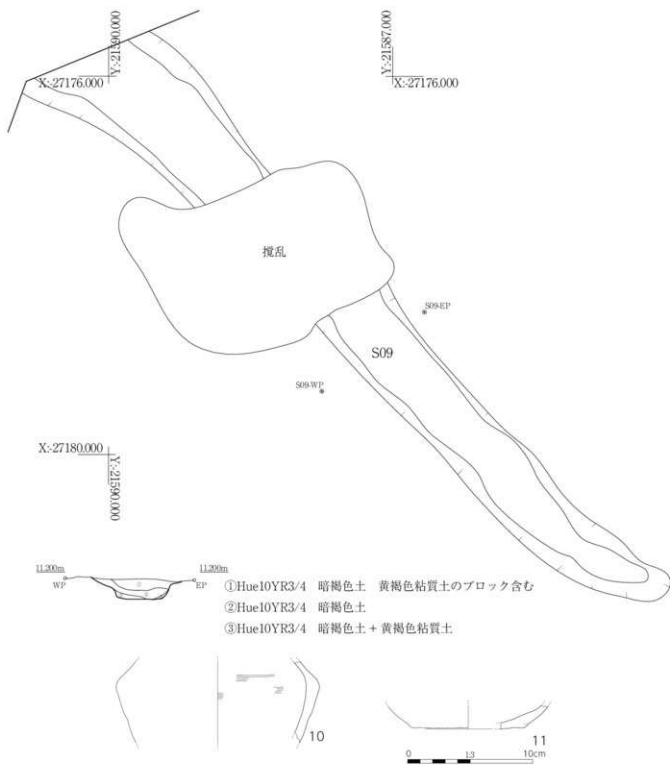
瓦質土器の風炉である。破片であり全容は不明である。胴部より頸に近い部分であると考えられ、屈曲部に境に器厚がかなり薄くなる。外器面は化粧土により覆われて調整は見えないが、内器面は横方向のナデが明確に残る。

○坏 (第13図-11)

土師器の坏である。小片であるため大きさについては不明であるが、底部からの立ち上がり具合から見て径は約15cm、器高は5cm程度を見込む。底部の切り離しはやや雑でヘラによる切り離しを行った際の跡が残される。



第12図 溝(S18)出土遺物実測図



第13図 溝 (S09) 及び遺構内出土物実測図

第6表 溝 (S09) 出土遺物計測表

遺物 番号	遺物 名称	材質	形状	用途	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	図面 番号	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	出 土 層	備考
10	土器	土	片断	不明	-	10.41	-	-	図面 No.1 (10/10)	黄褐色 No.2 (10/10)	ナシ	ナシ	ナシ	10	10
11	土器	土	片断	不明	-	11.91	10.81	-	図面 No.1 (11/11)	黄褐色 No.2 (11/11)	ナシ	ナシ	ナシ	11	11

2 遺物

表土中及び包含層から中世の遺物が出土した。

(1) 青磁 (第14図-12)

12は龍泉窯系の青磁壺である。底部のみであり、全体の様子は不明であるが、同窯の製品で坏に比べると底部及び口台が分厚いことから大形の器種を想定した。

(2) 瓦質土器 (第14図-13～18)

○火鉢

13,14は瓦質土器の火鉢である。ともに破片であり全容は不明である。13は半液体状の有機物が付着した後に焼けた事による所謂おこげの固着を受けている。ただし割れた断面にも付着していることからこれが割れた後にその物質が付着し、燃えることによって固着したものと考えられる。

○擂鉢

15,16は瓦質土器の擂鉢である。双方破片であり、胴部と底部である。底部付近にと同様炭化した付着物が認められる。

○香炉

17は瓦質土器の香炉である。底部のみであり、上部を欠く。脚は残存しているものは一つであるが元は三つであると推測される。器体全部に焼成後火を受けた事による二次焼成跡が見受けられる。

○鉢

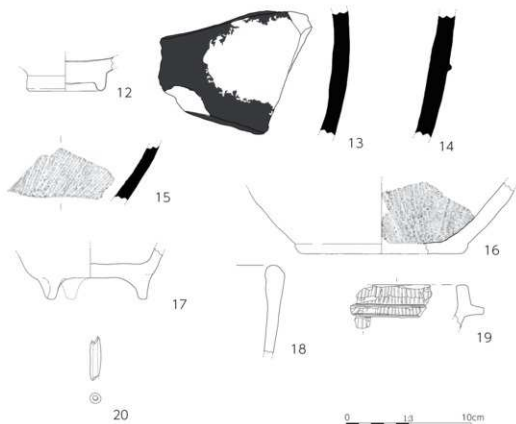
18は瓦質土器の鉢である。口縁からはほぼ直立する形状のもので口唇部は頂部でわずかに平坦となるも外器面に向かって斜行し、またその部分が肥厚する。内器面はへら削りののちナデで仕上げられわずかにその工具による段差を残す。香炉と同様に器体の一部に焼成後火を受けた事による二次焼成跡が見受けられる。

(3) 滑石製石鍋 (第14図-19)

19は滑石製石鍋の口縁部であり、口縁下に縁が1条回るものである。

(4) 土錘 (第14図-20)

土錘が1点出土した。孔径に比べてやや細身であるため器壁が薄い。重量は軽く、小形である。



第14図 包含層出土遺物実測図 (中世)

第7表 包含層出土遺物（中世）計測表

調査年度	遺構	出土層	時期	層位	種類	測定	寸法(mm)	重量(g)	出土(位置)	輪郭測定	調整(%)	調整(%)	用途	備考
13	-	-	-	中世	遺物	瓦	2.8	13.1	50-5111 50-5112	50-5111 50-5112	-	-	瓦片	埋蔵品
調査年度	遺構	出土層	時期	層位	種類	測定	寸法(mm)	重量(g)	出土(位置)	輪郭測定	調整(%)	調整(%)	用途	備考
14	-	III	-	高麗土層	中世	瓦片	2.8	13.1	瓦片、瓦筒 釜山地区産	瓦 No.10	瓦	50%調整	瓦片	瓦片内縁に彫刻
15	-	III	-	高麗土層	中世	瓦片	2.8	13.1	瓦片、瓦筒、瓦筒 釜山地区産	瓦 No.10 No.11	瓦	50%調整	瓦片	瓦片内縁に彫刻
16	-	III	-	高麗土層	中世	瓦片	2.8	13.1	瓦片、瓦筒 釜山地区産	瓦 No.11	瓦	50%調整	瓦片	瓦片内縁に彫刻
17	-	III	-	高麗土層	中世	瓦片	2.8	13.1	瓦片、瓦筒 釜山地区産	瓦 No.11	瓦	50%調整	瓦片	二次焼成の瓦筒
18	-	III	-	高麗土層	中世	瓦片	2.8	13.1	瓦片、瓦筒 釜山地区産	瓦 No.11	瓦	50%調整	瓦片	二次焼成の瓦筒
19	-	III	-	高麗土層	中世	瓦片	2.8	13.1	瓦片、瓦筒 釜山地区産	瓦 No.11	瓦	50%調整	瓦片	二次焼成の瓦筒
20	-	III	-	高麗土層	中世	瓦片	2.8	13.1	瓦片、瓦筒 釜山地区産	瓦 No.11	瓦	50%調整	瓦片	二次焼成の瓦筒

第8節 近世

1 遺構

地山を切り込んで形成する遺構は第7節で述べた土壌墓の可能性以外では認められなかった。ただし、地上にいくつかの墓標が散布しているほか、表面採集により当該時期の人の存在を窺わせる資料が存在するので紹介する。

(1) 墓碑 (第16図)

2つが事業予定地内の竹林中(第15図)から見つかった。双方ともに倒れており、地権者からの聞き取りによると、原位置から動かされたものであるとのことであった。なお原位置については付近であるものの不明である。

予備調査中であつたためフォトグラメトリによる記録に留めている。墓碑に刻まれた年代からAは享保十三年、Bは享保十二年とあるが、Bは十二年の後に戊年と刻まれており、干支を信用するならば実際は十三年である。ただし、いずれにせよほぼ同時期のものである事には間違いない。墓碑に刻まれた戒名からAは男性、Bは女性である。

(2) 石塔群 (第17図)

今回の事業地内には含まれていない(第15図)が、土地の南に隣接する土地の一角に石塔(五輪塔)の散布を認めたため地権者に断って記録を取ったものである。地目は墓地となっており、かつては所有者らによって手入れされていたものであるが、県外へ住まいを移してからは草が生い茂る状態である。

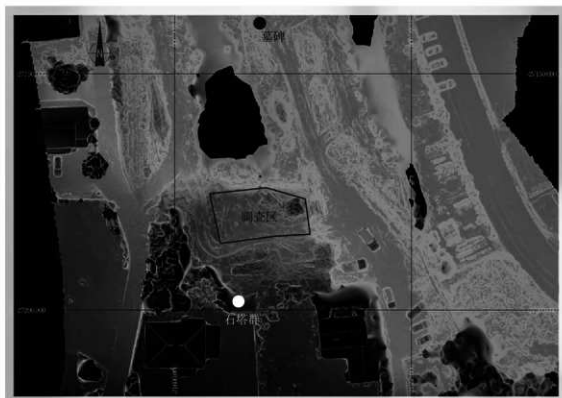
記録に際してまず散布範囲周辺に生えている草等を伐採し、簡単に清掃をしていくつかの標定点を付与し、フォトグラメトリにより記録を行った。処理後そのモデルを元にオルソ画像を作成した(第17図)。調査の時間制約もあり現状を記録するに留めたが、散布している石材のほとんどは五輪塔であり、一部は事業地内に転落していた。地表面に露出している石材の組み合わせからすると、地輪2、水輪2であり最低でも2基は存在することになる。地輪の位置に規則性はないが、上部構造である水輪は比較的近くにあり、さらに形状からか段差のある事業地内へ転落したものとみられる。記念銘等あれば建立年代を知ることが出来るのであるが、そうしたものは存在しなかった。ただ形状から江戸期のものと推定される。

その他の石材を実見したところ石塔とは関係ない間知石や瓦片などで、あるべき風輪や空輪は埋もれているか、別の場所へ移動したものと考えられる。

前述の墓碑やこれら石塔の存在からこの一帯が墓域であったことが推定される。

2 遺物

包含層及び表土から近世の遺物が出土・採集された。この土地が竹林化する直前までのものと考えられ、幕末～明治付近まで人の存在がうかがえる。



第15図 近世遺構配置図



墓碑 A



墓碑 B



第16図 近世墓碑オルソ及び墓碑銘図

第4章

総括

第1節 西光寺遺跡 2001 地点 での調査結果について

1 遺構

土層の大部分を削平によって失われており残存している遺構は少ないが、古墳時代の住居・土坑、中世の溝、中～近世の土壇墓が確認された。

(1) 古墳時代の遺構

住居としては小形であるが1基確認された。遺物はほとんど出土しなかったが床面から5世紀台（古墳時代中期）の高坏が出土している。遺跡の近くを流れる矢形川の対岸には井寺古墳が存在しており、関連が窺われる。同時期の遺構は町内ではこれまでにあまり認められず、下六嘉丘陵上においては初めて確認されたことになる。集落とするには極めて限定的であるため断言を避けるが、近隣に存在しその一端であることは間違いないだろう。

平成31年度に実施された下六嘉遺跡群1901地点の調査では古墳時代前期の遺構及び遺物が確認されており、下六嘉丘陵上に古墳時代前期の集落が存在することが明らかとなったが、古墳時代中期の遺物・遺構は確認できなかった。今回の調査により場所を違えて集落が展開した可能性を指摘するとともに

(2) 中世～近世の遺構

東西に流れる溝と緩斜面に分布する土坑墓状の方形土坑群が認められた。溝からは中世の土師器・瓦質土器が出土し、包含層からも比較的多くの中世遺物が出土した。瓦質土器は火鉢・播鉢を主体としており、鬼面足の香炉も出土している。遺構については溝以外判然としなない。

また、時期は不明であるが土壇墓とも思われる方形の土坑群を確認した。伐採された竹林中

から享保年間の墓碑が複数散乱していたり、隣地には石塔が存在するなどこの付近が近世期において墓域であった可能性を示している。

2 遺物

(1) 出土遺物

多くは表土および包含層からとなるが、縄文時代後期～近世にかけての遺物が出土している。

(2) 弥生時代の甕棺片

今回弥生時代中期の甕棺片が出土したのは西光寺甕棺墓群と呼称されるこの一帯における甕棺墓の存在を窺わせるものとして注目される。今回墓域については確認できなかったが、土器片の供給源となる場所は本地点からほど遠くない場所にあるはずであり、その位置は下六嘉丘陵における弥生時代の集落構造を知る上で重要である。

3 近世墓と石塔

事業地内及びその隣接地において、近世の墓碑と石塔がそれぞれ確認された。今回の調査地点においては西光寺の存在を窺わせる遺構は見出せなかったが、墓域及び石塔の存在は付近に寺がある可能性を否定できない。

第2節 西光寺遺跡について

1 西光寺遺跡の評価について

今回が初めての西光寺遺跡における本調査の実施となった。事業地のほとんどでは既に削平が及んでおり遺構が残されている部分が極めて限られてはいたが、包含層中に含まれる遺物や残された遺構により以下のことが見えてきた。

(1) 遺跡の年代

多くの場合、遺構は確認できなかったが縄文時代後期～近世にかけてこの土地の利用があったものと考えられる。

遺構の残存状況により弥生時代、古墳時代、中世にピークが求められよう。ただし、当時期において本遺跡に集落が展開されていたかについては、まだ確認できている部分が極めて限定的であるために確たることは言えないのが現状である。

(2) 「西光寺」について

第2・3章及び前節で述べたとおり、地名に残る西光寺という名称は寺院の存在をうかがわせるものの、現時点においては薬師堂や石塔群の存在によりそれをかすかに匂わせる程度である。地元の方に訊ねても、薬師堂の近くにあったのかもという程度で、確証を得られていない。

ただし、第2章で述べたとおり小字やそれよりも小単位の土地名称に寺村や大門などがあるため、寺域はやはり薬師堂がある丘陵東側斜面付近及び天然ブルー帯に広がるものではなかったであろうか。

問題としては本調査を含め周辺において開発に伴う予備調査をここ数年で複数件実施しているところであるが、未だに寺域を捉えるには



第19図 「西光寺」 寺域の推定

到っていない。原因の一つとして下六嘉丘陵においては今まで宅地であった部分では表土下すぐにローム層が露出する点にある。どうもその場所を宅地とする際に一旦安定した地盤となるローム層まで削り、その上に宅地の基礎となるものを置いて建築しているようである。

他方で墓域や藪であった箇所については旧来の地形が残置されているため遺構が残るという寸法である。

よって寺域として推定している箇所においては既に宅地となっており、遺構が消失している可能性が極めて高いわけであるが、今後も開発等に伴う調査においては注意しつつ寺域の特定に努めたいと思っている。

【主要参考文献】

嘉島町教育委員会 2021「井寺古墳」〔嘉島町史跡整備関連報告書〕第1集 嘉島町教育委員会
嘉島町教育委員会 2021「下六嘉遺跡群 1901 地点」〔嘉島町文化財調査報告書〕第7集 嘉島町教育委員会